

# ナラティブ分析によるへき地教育プログラムと新卒教師の意識

## —新卒へき地小規模校赴任者から見たへき地意識転換のプロセス—

川 前 あゆみ  
(北海道教育大学釧路校)

Rural Education Program based on Narrative Approach and Consciousness of New Teacher for Rural Education : Process for Conversion of Consciousness about Rural Education from the Point of View of New Teacher in Rural Small School

Ayumi KAWAMAE

### 【概要】

本稿の課題は、都市近郊・市街地出身の学生が、へき地教育に関連する講義・へき地校体験実習を受講し、卒業後にへき地小規模校に赴任した場合のその意識のプロセスをナラティブ (narrative) にとらえることである。

学生から新卒赴任までの短い期間ではあるが、ナラティブ分析により、大学入学以降のへき地教育への意識変遷とへき地教育プログラム (講義・実習等) の教育効果があることを明らかにした。

### 第1節 本研究の課題と方法-検証確認としてのナラティブ分析

#### 1. 「プロセスレコード」分析に比したナラティブ分析方法の意義

本稿の課題は、都市近郊・市街地出身の学生が、へき地教育に関連する講義・へき地校体験実習 (以下、へき地教育実習と言う) を受けて、へき地小規模校に赴任した場合に、その意識のプロセスを4年間の学生生活を振り返ってナラティブ (narrative) にとらえることである (注1)。すなわちへき地小規模校に赴任した後で、大学でのへき地教育プログラムと現在のへき地小規模校での実践との関連をとらえてもらうことである。

このナラティブ分析とは、元々精神医療等でセラピーとして使われていたもので、しばしば自分史活動や自己認識活動等で利用される語り口の叙述物語による意識分析である (注2)。新卒教師がへき地小規模校に赴任した時に、へき地小規模校に抵抗感があるかどうか、その意識とへき地教育プログラムを経験したこととの関係があるかどうかをとらえることが、へき地教育プログラムの検証を進める上でメルクマールの一つとなる。

大学在学中の教育実習期間等で、学修・実践過程において記録を取りながら、何を学んだかを蓄積していく「プロセスレコード」の分析手法 (注3) は、学修・実践の過程そのものの中の学びである。そのために、比較的短期的でミクロな知識・技能を中心としたへき地教育実習等による認識の変化をとらえることができる。

一方、ナラティブな分析は、後になって振り返りの中での認識の変化を自分自身でとらえるために、比較的長期的でマクロな認識の変化や相対的な意義づけをとらえることができる。ナラティブな振り返りでは、後になって振り返

る中で、無意識のうちに変化したいいくつかの諸要素が結びついて見えてくることも少なくない。そのため学修の過程を終えた後で、長期的なへき地の講義・実習等の学修成果をとらえるために、ここではナラティブな分析法を採用する。ここでのナラティブ分析の対象者は、すでにへき地教育プログラムが始まった2006年以降にへき地教育実習に参加した学生の中で、へき地小規模校に赴任した新卒教師を対象にした。

へき地教育実習は必須実習ではないため、へき地教育実習に参加する学生は、元々学習意欲が高い学生である。へき地教育実習の評価とへき地赴任後の成長も一般的に比例すると考えられるため、少数の事例であっても、ナラティブな分析によって、へき地教育プログラムとへき地への赴任との関係を典型的にとらえることができる。

また本来的にへき地小規模校やへき地教育への関心は、全入学学生が同じような関心を持つわけではない。すなわち、教員の関心や資質によって、小中高の校種の選択、通常学級か特別支援学級かの選択、免許教科の選択、などと同様に、へき地か都市部かの教員の志向性も選択的である。その中でもへき地小規模校への定着を図るために、一般的なへき地の学修から、徐々にへき地教育を中心的に担う担い手が現れることが重要である。したがって、へき地教育実習を選択する学生が、へき地小規模校への赴任を忌避せずに、一定の自信と関心・意欲を持って赴任することが重要である。長期的にへき地に定住するかどうかは、個々の教師のライフサイクルによるため、へき地への永住までを求めるものではなく、へき地小規模校への赴任を拒否したり意欲をなくしたりしないことに限定して、へき地教育への姿勢をとらえるものである。

ここでのナラティブな分析は、へき地小規模校に赴任し

た新卒者に限定しているために、ナラティブな分析法の中では、4年間という比較的短期間の分析である。したがって、へき地教育実習の「プロセスレコード」分析でへき地教育の学びを深めたことの最終的な検証として用いている。北海道の新卒者の赴任地は、本人の希望と関係なく配属されるので、最終的に配属された教員が、何らかの形で前向きな姿勢でへき地小規模校の実践に取り組んでくれれば前進的であり、へき地教育プログラムにも効果があったと言える。

## 2. 本稿でのナラティブ分析の聞き取り方法

ナラティブな分析は、ライフロンディングとしての手法として用いられることが多い。なぜなら、生涯学習の方法自体が長期的でトータルな成長を求めているからである。そのためライフステージに合わせてライフストーリーが展開されるのが一般的である。

ただ、ここでのナラティブな分析では、大学時代の学びから新卒に至るまでの数年以内の成長と意識変化をとらえる。そのために、ライフステージの転換点というよりは、へき地小規模校に赴任するまでの学びとして、大きな要因となったと予想される点を、表1のように指し示し、それを踏まえて現在のへき地小規模校赴任までの意識について、自由にふり返りながら語ってもらうことにした(注4)。

以下3人のナラティブなストーリー(別表1～別表3)から、抽出できる共通項を抜き出していきたい。

表1 ナラティブストーリーのために提示した主要要素

1	道東の北海道教育大学釧路校に入学したことについて
2	新入生研修でへき地小規模校訪問をしたことについて
3	1年次のへき地教育論の講義(特にパラダイム転換)を受講したことについて
4	3年次の主免・市街地教育実習後にへき地教育実習を行うことについて
5	へき地地域に2週間滞在するへき地の生活について
6	へき地小規模校における地域との連携について
7	へき地教育実習で学んだ教育姿勢・指導方法・地域連携等の教育観について
8	新入生研修からへき地小規模校体験実習までのプログラムの全体的な流れについて
9	へき地教育実習を経た上でへき地小規模校に赴任することについて

## 第2節 漠然としたへき地教育への関心と道東の釧路校への入学動機

北海道教育大学釧路校は、国公立・私立大学を含めて日本最東端にある大学で、釧路市自体が過疎地域指定地である。したがって、入学生の中にも何となく釧路校は、へき地にあり、へき地教育を担っているというイメージが漠然

とある。これらの地域的な特質を意識的に打ち出し、へき地教育の講義とへき地教育実習を体系化するへき地教育プログラムを試み始めたのが、2006年である。へき地教育プログラム開始当時は、試行錯誤的に行っているため、現在の内容に比べて至らない点が多い。それでも意識的に教育課程として取り入れるようになった点は、入学学生のアイデンティティにも影響を与えていると言える。

A先生の釧路校への入学意識は、「釧路に来ること自体がへき地に行くという感じなので、釧路校に入学した時点でへき地に行くことの抵抗感はそれほどなかった」ととらえている。釧路校自体が何となくへき地を意識させているが、改めてへき地教育を特色にすることで、入学生はそれを積極的な特色として鮮明に意識することができる。

B先生の入学動機は、「へき地の小学校教員をやろうと思っていた」ので、釧路校を選択したという。B先生も何となくへき地小規模校の教師を目指すこと=(イコール)釧路校への入学というイメージはあったと言える。

へき地に位置する釧路校が、仮にへき地教育プログラムを実施していなければ、意識的にへき地に関心を寄せる動機は強くないかもしれないが、へき地教育を逆に鮮明に打ち出しているからこそ、へき地教育の学修活動をプラスの入学動機として意識することができたと言える。

## 第3節 へき地小規模校訪問新入生研修とへき地教育論講義との統一的な認識と教育効果

へき地教育プログラムの中で、1年次にほぼ必須の形で全員が受けるのは、へき地小規模校に5月末に訪問する新入生研修と、1年次前期のへき地教育論講義である。へき地小規模校訪問は、これまで新入生が受けてきた市街地大規模校とは異なる感動体験を中心とし、またへき地教育論講義では、マイナス面と見なしていた点を評価観点と評価基準を変えることによって、へき地教育の評価をプラスに変えるという授業を行ってきた。

A先生の新入生研修の評価では、「新入生研修は、入学時のインパクトとしてはかなり強かった」としている。それは、「人懐っこい」雰囲気などが、自分の出身校とは異なっていたからである。

B先生は、「へき地小規模校訪問は、周りの友だちを見ていると、大きい学校出身の人にとっては、自分を含めてへき地の少人数教育を見るというきっかけにはなった」ととらえている。

C先生も「はじめてこんなに小さい学校があるのかと思った」とへき地小規模校の印象の強さを述べている。

これらの新入生当時の印象は、最初のへき地小規模校を視た驚きを契機にして、その後もへき地を見たり関わりを持つ意識につながっている。1年次の講義と新入生研修との関係では、講義に加えてへき地小規模校を見たという経験が講義の意図を強く印象づけている。

A先生は、講義を通じて、「現場ではいろいろなことが

あり、必ずしもすべてがいいわけではないと思うが、へき地のマイナス面だけでなく、へき地教育のいい面を含めてとらえられたことは、自分にとってはよかった」としている。講義でへき地教育のプラス面とマイナス面を聴いていなければ、赴任した後で、マイナス面だけを意識していたかもしれない。

B先生は、「へき地の講義を1年から聞いているので、実際にまず見たというのは大きい」としている。

C先生は、講義の「パラダイム転換」の内容で、「マイナス面をプラス面に変えていこうという言葉は今でも覚えている」としている。さらに、「へき地を見て、体験してみても、こういうパラダイム転換という発想がよく実感できた」としている。すなわち、講義を聴いた後で、新入生研修でへき地小規模校を訪問したことが、講義の内容を意識させるきっかけとなっている。

#### 第4節 市街地教育実習後のへき地教育実習の意識変化と教育効果

へき地教育実習は、3年次後期以降に設定している。そのため、主免の釧路市内等の市街地の教育実習を経て、へき地教育実習を経験することになる。主免教育実習直後のへき地教育実習は、極めて学習指導方法が異なるため、それらを鮮明に比較することができる。

A先生は、市街地の教育実習校とへき地実習校を「比較できたことは、後になってみるとへき地教育の特徴や良さを意識する上で大変重要であると思った」としている。またA先生は、「主免実習でやろうとしてできなかったことが、へき地小規模校ではできる」とへき地小規模校の可能性を感じている。さらにA先生は、「複式授業などの難しさを体験したが、子どもたちをしっかりと一人一人把握して指導すれば、やりやすさも感じた」としている。

B先生は、へき地教育実習に行った後で、「主免実習では、『何々しましょう』『何々考えましょう』という全体への大雑把な指示に終始していたことに気づいた。指示の明確化や活動目的をはっきりさせることなど、今思えば、へき地小規模校での複式指導はかなり役に立った」と振り返っている。へき地教育実習を終えて、「行く前は、複式に対する独自の指導方法という点で、少し複式指導に不安はあったが、へき地教育実習をしてみてその不安はだいぶなくなった」「赴任したとしても、何とかなるのではないかという思いが出てきた」と気持ちの上でのへき地への共感の感情を述べている。

C先生も、「主免実習の後に3年でへき地教育実習に行ったが、強烈に比較できた。授業を進める方法がまったく違うことがよくわかった」と述べている。また「主免は、30人以上いたが、へき地を経験して、授業は複式という点でも少人数指導の個々の子どもを把握するという意味でも、へき地小規模校の方が大変なのはと感じた」と述べている。へき地教育実習前は、へき地小規模校は少人数なので、

比較的指導が楽なのではないかと甘く考えていたことに対して、自分のへき地の実践に対する課題を見つけていた。その上で、「へき地教育実習が終わった後は、むしろへき地小規模校に行ってみたいと思った」と、へき地への共感性をいっそう強めている。

これらのナラティブな振り返りように、主免実習を終えた後であるからこそ、へき地教育の特性と実践課題を鮮明に意識できていると言える。

#### 第5節 へき地の生活経験とへき地地域との関係による教育効果

へき地教育実習では、へき地の生活を体験するために、実習校の校区内宿舎を借りて、2週間生活する。宿舎は、下水道がついていないために、基本的に水洗式トイレではないことが多い。場合によっては、宿舎の建物も新しいわけではなく、快適な空間であるとは言えない。また地域には大きなスーパーや書店・文具店等があるわけではなく、決して便利であるとは言えない。このようなへき地地域に住むことも一つのへき地教育実習の目的としている。これは柔軟な学生時代に少しでもへき地に住むことで、へき地赴任の生活への適応力が高まるからである。

さらにへき地教育実習期間が設定されている秋季は、学芸会やお祭りなどの行事もあるため、地域住民がこれらの行事に関わっている状況に学生が遭遇する場面が少なくなる。そのため学校の教育課程だけでなく、地域と連携した行事運営や保護者・地域住民との日常的なつながりも経験することができる。

A先生は、「へき地小規模校に宿泊して、地域住民と飲みながら交流したことなど、へき地に入ってから地域住民と交流したことは、へき地小規模校に赴任して保護者や地域住民と交流することの抵抗感もなくなり良かったと思う」としている。

B先生は、生活に関して、「すぐに手に入るわけではなかった。買い物ができないことは、マイナス面だと思うが、ある物で工夫しようという発想も出てきた」として、へき地の生活経験をプラス面に考えている。また「地域の強い人とか浜言葉のような話し方が苦手だという人もいるが、自分としては交流する仕方を学んで良かったと思っている。赴任したら、先生という立場なので、踏み外せないという恐れもあるが、学生の時に交流すると、付き合い方がよく分かる」としている。すなわち、へき地の住民との交流の経験が、へき地小規模校に赴任しても、地域住民と抵抗感なく交流できる条件となっている。

C先生は、「へき地小規模校の授業は大変だと思ったが、へき地実習を終わってから学校から行事に呼んでもらえたし、地域の人も歓迎してくれて、その雰囲気が好きだった。へき地教育実習が終わった後は、むしろへき地小規模校に行ってみたいと思った」と、へき地への赴任を肯定的にとらえるようになっている。また「へき地小規模校実習

では、地域とのつながりは強いと思った。地域とつながりを作るという点は、見方は変わった」としている。

これらを見ると、学生時代でのへき地の生活体験や地域住民との交流が、先生としての権威を持った立場でのへき地赴任に比べて、へき地への心理的抵抗感を軽減することに役立っていると言える。

## 第6節 へき地教育プログラムとへき地赴任への自信

### 1. へき地教育プログラムの体系性と無意識的な発展学習効果

新卒教員が全体的なプログラムをどのように見ているかは、へき地に赴任している現在から観て、へき地教育プログラムがどのように1年次から段階的に発展しつつ、現在まで運動していると感じているかをみれば、とらえることができる。

A先生は、「元々へき地への抵抗感が少なかったからかもしれないが、振り返ってみると、へき地教育の講義も実習も、へき地小規模校に赴任する上での抵抗感を縮減する上で大変いい経験になっている」としている。

B先生は、「大学時代は、講義とへき地実習を1年生からの積み上げでやっているのは良かった」としている。

C先生は、「へき地の専門的な内容や難しさも勉強したが、授業に違和感があるとか、難しいとかは感じたことはなかった。むしろ素直な気持ちで受け入れることができた」としている。

いずれの先生も、元々抵抗感がない上に、さらに講義と実習を積み上げていくことを通じて、いっそうへき地への抵抗感がなくなっていると言える。

### 2. へき地教育実習の経験とへき地赴任への自信

へき地教育実習は、新卒教員から観ても、ある意味ではへき地小規模校赴任の自信につながっていることが分かる。

複式授業や少人数指導は、市街地の一斉指導とは異なるため、へき地小規模校の実践に対する不安もある。新卒教員は、どここの学校に赴任してもトータルな実践全体について不安があるが、さらにへき地小規模校の独自性に対する不安感はさらに高くなる。

しかし、新卒教員の意識としては、へき地教育実習を2週間受けただけでも、自信やへき地赴任への興味関心になっていることが分かる。学生たちは、へき地教育実習に行く前は、ある意味では、へき地教育は人数が少ないので、大したことはないのではないかと考えていたり、一方で、独自の少人数指導について不安であると考えている場合が少なくない。それがへき地教育実習経験後は、へき地の困難な状況を感じながらも、一方で、へき地教育実習まで参加したことに対して、「行っていない人よりはよりうまくやれる」という自信につながっている。

A先生は、トータルに見て「へき地小規模校の赴任はよかったと思う」「講義や演習を受けたり、へき地小規模校に訪問したりすることを積み重ねてきたので、へき地小規模校に赴任することへの抵抗感は全くなかった」ととらえている。

B先生は、「へき地教育実習に行って、へき地小規模校に赴任する恐れはなくなったので、自分でへき地小規模校を希望しました。2週間だけだけど、少しでもへき地小規模校に行って知っているという自信と誇りもあったのかなと思う」と述べている。すなわち自信を付けて、自らへき地小規模校に赴任したいと考えるようになっている。

C先生は、「身近にへき地の話しかなかったら、やはりへき地に行くことの抵抗感はあったんじゃないか」としながらも、へき地教育実習は「トータルに見て、それは役に立つと思う。少なくともへき地小規模校に赴任することを拒否はしないと思う」と述べている。

このようにへき地教育実習は、へき地小規模校への新任教師に聞き取る中では、自ら積極的に地域に身を置きながら、へき地小規模校赴任をプラスに受けとめている。このようにへき地に関する感動体験とへき地教育実習およびへき地小規模校の知識が、へき地小規模校への赴任拒否をしないような心理につながっていると言える。

このへき地教育実習は、選択オプションの実習でもあるため、全員が履修するわけではない。しかし、へき地小規模校に少しでも関心を寄せる学生が集まり、へき地教育の講義やへき地教育実習を履修した学生は、へき地小規模校への評価が転換したり、へき地への親近感をいっそう感じたりしている。

## 第7節 小括

これまでとらえてきたように、学生から新卒赴任までの短い期間ではあるが、ナラティブ分析により、大学入学以降のへき地教育への意識変遷とへき地教育プログラムの教育効果をとらえてきた。入学時から新卒赴任時まで振り返ることによって、結びついて見えてくることも少なくなる。また新卒教員として赴任するまで覚えているへき地教育プログラムに関する感情や知識は、何らかの形で潜在的なへき地意識として残っていること、すなわち無意識のうちにへき地教育への発想の広がりへの影響を受けていたととらえることができる。

1年次のへき地教育講義は、へき地のプラス面とマイナス面をとらえながら、へき地の教育のプラス面を意識し始めていたが、さらに新入生研修によって、実感的に認識している。講義は、4月から受けているが、基礎的な概況を踏まえながら、さらに5月末のへき地小規模校訪問の新入生研修によって、へき地意識のパラダイム転換が強くなっていることが分かる。

3年次の主免教育実習後のへき地教育実習は、市街地大規模校とへき地小規模校の相違を典型的に意識することが

できていた。少人数では、個々の子どもに合わせた指導を展開しており、一斉指導において個々の子どもをとらえられていないことに気づくとともに、人数が少ないことを活かしてできることがあるというメリットも感じていた。

へき地の生活経験では、へき地の学校では地域との結びつきが極めて強いことが理解されており、市街地では意識されにくい点を経験していた。また学生の身分で地域住民と交流していたことが、へき地の教師になった後も気負いなく、普通に地域住民とつきあうことができるようになっている。

へき地教育プログラムの段階的な発展に関しては、その都度の学年に応じて抵抗感なく受け止めている。抵抗感がないということは、段階的に認識しやすい内容と実践を積み上げていることを意味している。新入生研修とへき地教育の講義が一緒になっているからこそ、講義内容も理解できたであろう。市街地大規模校の実習を修了した後のへき地教育実習であるために、へき地教育実習の大変さと、少人数指導をプラスに活かす発想も認識することができた。またへき地の生活体験や地域住民との日常的な交流は、教師という社会的権威を持つ前の学生時代であるからこそ、権威を意識した気負いもなく地域住民と普通につきあうことができ、そのことがへき地小規模校に赴任しても、地域住民と日常的につきあうことの抵抗感を薄らげている。

へき地教育プログラムの体系化は、順次1年次の感動体験としての1日訪問とへき地のパラダイム転換を基盤にしたへき地教育論の講義を出発点としながら、主免教育実習を終えた後のへき地教育実習に至るように体系化している。これらをトータルにつなげていくと、短い体験から長い体験へ、基礎的知識から専門的知識に展開するように組み立てている。

最終的なへき地教育実習に行く学生は、3年生を中心に30~40人程で学年全体の20%程度である。しかしそれでも、へき地教育実習までのへき地教育プログラムを受けた人の中でへき地小規模校に赴任した教師にその意識を聞くと、へき地教育の自信として今日までつながっていることが分かる。何となくへき地教育に興味を持ちながら、釧路校に入学した学生であったが、段階的にへき地教育プログラムを受けて、へき地教育実習に参加したことが、へき地小規模校に赴任しても順応していけるという自信となっている。

ここでの分析は、意欲的な新卒へき地赴任者の若干名のナラティブ分析であるが、その中でへのき地教育プログラムとへき地赴任への抵抗感の低減には関連があった。へき地教育プログラムを受けていれば絶対的にへき地教育への定着が高まるというわけではない。しかしこのようなへき地教育プログラムの取り組みを継続していることが、少しでもへき地に関心ある者を増やし、へき地小規模校に赴任したときに抵抗感なく赴任できる教師を増やしていくことにつながっていると言える。

## 〈注記〉

### 注1.

北海道教育大学釧路校では、「へき地校体験実習Ⅰ」を2年次夏季休業中に1週間の実習として実施し、「へき地校体験実習Ⅱ」は主免実習を修了した3・4年次を対象として実施している。つまり、3・4年次にとっては、主免実習の経験と比較しながらへき地小規模校での実習に臨むことができる。

### 注2.

ナラティブの方法としては、例えば以下を参照されたい。事例分析・臨床的分析は、量的分析に比して、常に客観性に欠けるのではないかという指摘もあるが、個々人のミクロの学びをとらえることで見えてくる意識変化も少なくない。元々医療や看護の治療の一環として、ナラティブアプローチが用いられることが多かったが、近年は、教育実習での分析にもナラティブな分析法を用いる実践的な研究も現れている。

藤原顕「教師の語り-ナラティブとライフヒストリー」、秋田喜代美・藤江康彦編『事例から学ぶ はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書、2007年。

### 注3.

へき地教育実習を対象としたプロセスレコード分析としては、拙稿「プロセスレコード分析による学生のへき地・小規模校教育の特性認識と実習指導課題：へき地教育実習を通じた気づきの意識化」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』62(2)、135-150頁、2012年、を参照されたい。

### 注4.

木村涼子「インタビュー法」、小泉潤二・清水宏吉編『実践的研究のすすめ-人間科学のリアリティ』有斐閣、2007年、参照。インタビューは、調査者との信頼関係を前提にした上で成り立つものであることが指摘されている。

## 〈付記〉

### 付記1.

へき地校と小規模校は、本来的には別の概念であるが、本稿では、へき地校であり小規模校である学校をへき地小規模校と総称している。

### 付記2.

本研究を進めるにあたり、インタビューにご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

また、本研究の「へき地校体験実習」は、「釧路校へき地校体験実習委員会」関係者が中心となって実習校ならびに教育委員会と連携、実習生への指導などの運営に携わっています。さらに、本学の全学組織である「学校・地域教育支援センター へき地教育研究支援部門」との協力により、大学再編後の2006年以降推進しているものです。

## 別表1～3 へき地校体験実習を経験したへき地小規模校赴任教師のナラティブな振り返り

別表1 A先生の場合（道央A市出身・道東へき地2級校赴任）

道央のA市出身なので、元々都会的な雰囲気の中で過ごしてきた。大学を選択するときには、何となく特色を意識していたが、釧路校に来てへき地教育が特色であることがよくわかった。A市から釧路に来ること自体がへき地に行くという感じなので、釧路校に入学した時点でへき地に行くことの抵抗感はそれほどなかったように思う。

へき地小規模校を訪問する新入生研修は、入学時のインパクトとしてはかなり強かった。かなりの小規模校に行ったが、人懐っこい子どもたちが印象的だった。自分の子ども時代と比較して見ていた。

釧路に来る上での特色として、へき地教育の講義は、受けてみたいと思った。講義を受けてみて、へき地にもプラス面があることが意識できた。現場ではいろいろなことがあり、必ずしもすべてがいいわけではないと思うが、へき地のマイナス面だけでなく、へき地教育のいい面を含めてとらえられたことは、自分にとってはよかったと思う。

釧路校は、1年生から教育フィールド研究とかで学校に入る機会も多いので、子どもとの関係作りや授業観察などができていることが、へき地小規模校の学校を含めて赴任したときの実践的指導力につながっていると思う。へき地小規模校に赴任する場合も、基本的な指導力はどこでも必要なので、教育フィールド研究や主免許実習・副免許実習・特別支援実習などのすべてが結びついていると思う。

へき地実習も早くからいきたいと思っていた。主免許実習は母校のA市で行ったので、A市の大規模校の実習を経て、比較することができた。それらを比較できたことは、後になってみるとへき地教育の特徴や良さを意識する上で大変重要であると思った。へき地小規模校の教育実習では、複式授業などの難しさを体験したが、子どもたちをしっかりと一人一人把握して指導すれば、やりやすさも感じた。へき地教育実習は、教育のおもしろさを感じることができた。主免許実習でできなかったことが、へき地小規模校ではできると感じたことも多かった。

教育フィールド研究や教育実習の時から、教育フィールド研究でも目標→活動→反省→次回の目標をしっかりとやることをやってきたが、その習慣を確実に行っていけば、へき地小規模校での実習は、非常に成長できると思った。へき地教育実習に行行って良かったと思う。

へき地小規模校の赴任はよかったと思う。へき地小規模校への抵抗感は、釧路校に来た時からそれほどなかったと思うが、いろいろなへき地に関する講義や演習を受けたり、へき地小規模校に訪問したりすることを積み重ねてきたので、へき地小規模校に赴任することへの抵抗感は全くなかった。

へき地教育については、教育実習だけでなく、研究室の演習でも学び、研究室の活動の一環としても、へき地小規模校の運動会・学芸会やへき地小規模校の住民との宿泊交流などをしていたので、元々抵抗感がなかったものが、さらになくなったように思う。研究室でへき地小規模校に宿泊して、地域住民と飲みながら交流したことなど、へき地に入ってから地域住民と交流したことは、へき地小規模校に赴任して保護者や地域住民と交流することの抵抗感もなくなり良かったと思う。

へき地教育実習などでいろんな人から丁寧な指導・意見を頂いたことや、周りと協力しあうことで、高まったと思う。元々へき地への抵抗感が少なかったからかもしれないが、振り返ってみると、へき地教育の講義も実習も、へき地小規模校に赴任する上での抵抗感を縮減する上で大変いい経験になっていると思う。それらの経験は、今でもへき地小規模校に赴任して、現場で役立っていると思う。

別表2 B先生の場合（道南B市近郊出身・道南へき地1級校赴任）

今振り返って見ると、釧路校新入生研修は、入学時のインパクトとしてはかなり強かったので、釧路校に行きたいとは思っていた。渡島管内にいたので函館校に行くことも考えたが、道南のへき地の小学校教員をやろうと思っていたので、釧路校を選んだということもある。

新入生研修でのへき地小規模校訪問は、周りの友だちを見ていると、大きい学校出身の人にとっては自分を含めてへき地の少人数教育を見るというきっかけにはなかったのかなと思う。色々なへき地の講義を1年から聞いているので、実際にまず見たというのは大きいと思う。へき地の講義では、マイナス面をプラス面に見方を変えていくという授業は覚えている。

へき地教育実習に行く前と後では、行ってみて複式に関する知識と経験が得られたのは、今思うと良かったと思う。行く前は、複式に対する独自の指導方法という点で、少し複式指導に不安はあったが、へき地教育実習をしてみてその不安はだいぶなくなった。へき地小規模校に赴任したとしても、何とかなるのではないかという思いが出てきた。へき地小規模校赴任前に、へき地のイメージが分かるだけでもいいと思う。

へき地教育実習では、へき地の生活を実習生同士と一緒に共同生活したのはよかった。釧路市内にいる時は、必要な物がとすぐに買いに行ったりしたが、へき地では教材を自分で作ろうとしてもすぐに手に入るわけではなかった。買い物ができないことは、マイナス面だと思うが、ある物で工夫しようという発想も出てきた。へき地の生活の大変さも感じたが、休日になると実習生同士で釧路市にまで出て行って遊んだが、休日と平日の区別をつける生活に慣れることができた。

3年時夏の主免教育実習では、30人学級に入ったが、へき地小規模校では複式という形態に慣れてみたいという気持ちがあった。複式では“わたり・ずらし”の形式があるので、複式授業を実際にやってみると、かなり個別の子どもの状況を踏まえて、指導内容を練らないと複式はできないということに気づいた。その個々の子どもを観るという考え方は、単式学級の指導でも生きている。単式での主免実習では、「何々しましょう」「何々考えましょう」という全体への大雑把な指示に終始していたことに気づいた。指示の明確化や活動目的をはっきりさせることなど、今思えば、へき地小規模校での複式指導はかなり役に立ったと思う。

へき地教育実習にいくと1年生から6年生の子どもまで全員が役割を果たしていたり、縦の関係があったり、都市部よりも子どもの役割が明確であるというのが分かった。子どもの集団の指示を考える上ではよかった。

主免実習では、自分自身も未熟であったために、困難で厳しい教育活動の側面もあったので、自分で教師をやれるのかなという思いもあった。その後のへき地教育実習では、再度教師をやれるのではないかと自信も出てきたので、実習に参加するという側面でもいいと思う。

へき地教育実習に行って、へき地小規模校に赴任する恐れはなくなったので、自分でへき地小規模校を希望しました。2週間だけけど、少しでもへき地小規模校に行って知っているという自信と誇りもあったのかなと思う。自分では、講義で習ったマイナス面をプラスの発想に変える「パラダイム転換」も、今となってはへき地に勤める上で自分の意を強くしたと思う。

へき地教育は、全員参加の教育で、子どもたちの主体性を伸ばしていけると思う。小さい学校で、低学年でも色々やることをやれるんだという気持ちは強く持った。低学年の子どももやれているのだから、中高学年はもっとやれるようにすればやれるんだろうという思いはあった。

へき地では、一般的に言われる地域連携については、地域がとても協力的であるとは思った。運動会・学芸会などの行事では、親や地域の人が学校に協力的で、先生方も親しく話しをしているのを見て、学校と地域の連携のあり方も学んだ。市街地の親は自分の子どものビデオを撮ることばかりに気をとられる傾向もあるが、へき地では学校の行事運営に協力的であることを学んだ。へき地では“オラが学校”のイメージはある。

学生時代に地域の人とお酒を飲んだり、交流したりしたこともよかった。地域の人に対して構えずに交流できた経験が教師になってからも地域連携の発想が生きている。学生の中には、地域の強い人とか浜言葉のような話し方が苦手だという人もいるが、自分としては交流する仕方を学んで良かったと思っている。赴任したら、先生という立場なので、踏み外せないという恐れもあるが、学生の時に交流すると、付き合い方がよく分かる。へき地では、地域の人から見られていて、地域との付き合いを大事にしなければやっていけないので、学生の時にそのような覚悟を持つことも重要だ。一般的には、教師が地域に入ることは当たり前ではないと思うが、自分は釧路校でへき地の地域の人との交流もしているのだから、それが当たり前だと思えていることは良かった。

大学時代は、講義とへき地実習を1年生からの積み上げでやっているのは良かった。3年生の主免実習のあとに、3年生の秋にへき地教育実習を行ったので、主免教育実習とへき地実習を比較しながら実践を考えることができた。

それは教員採用試験でも生きてきた。1年生からの教育フィールド研究も、1年生から色んな子どもがいることを見て、色んなことをやったり、考えたりすることができた。児童理解でもベースになっている。それらの児童理解とへき地教育実習とも結びついて、今に活着ていると思う。

別表3 C先生の場合（道北C市出身・道北へき地1級校赴任）

新入生研修で行った時は、全校児童6人で最初はびっくりした。友だちに行っていた人もないので、はじめてこんなに小さい学校があるのかと思った。へき地教育実習に行ったのは、周りの研究室の先輩も行ってたから行こうかなと思ったけど、最初から行くという気持ちはなかった。身近にへき地の話しが無かったら、やはりへき地に行くことの抵抗感はあったんじゃないかと思う。行くか行かないかは迷っていたが、逆に迷うのなら、行ってみると自分の経験にもなるし、へき地実習のような機会がないと、へき地はめったに行ける所ではないのではないかと思った。

講義でも「パラダイム転換」のマイナス面をプラス面に変えていこうという言葉は今でも覚えている。1年生の時に聞いたので、そういう見方を変えるという発想もあるのだと思った。ただそれがへき地小規模校の見方を変えるところまでは講義ではつながっていないのではないかと思うが、へき地に行ってみて、見方を変えることの重要性が分かった。へき地を見て、体験してみて、こういうパラダイム転換という発想がよく実感できた。

主免実習の後に3年でへき地教育実習に行ったが、強烈に比較できた。授業を進める方法がまったく違うことがよくわかった。主免は、30人以上いたが、へき地を経験して、授業は複式という点でも少人数指導の個々の子どもを把握するという意味でも、へき地小規模校の方が大変なのではと感じた。

へき地小規模校の授業は大変だと思ったが、へき地実習を終わってから学校から行事に呼んでもらえたり、地域の人でも歓迎してくれて、その雰囲気が好きだった。へき地教育実習が終わった後は、むしろへき地小規模校に行ってみたいと思った。へき地の学校がいいと思えた。

“道東の教育”の授業も履修して、へき地の専門的な内容や難しさも勉強したが、授業に違和感があるとか、難しいとかは感じたことはなかった。むしろ素直な気持ちで受け入れることができた。

へき地実習の生活は、へき地の小規模校の教員宿舎に泊まったが、スーパーもあるが物は少ないし、不便ではあると思った。でも2週間だからか、何となく慣れて終了した。こういう地域は自分には無理だとかは思わなかった。トイレとかハエとかは気にならなかった。

へき地に最初に赴任することの心理的負担は、周りの人も知らない所に行くことへの不安はあると思う。へき地小規模校の若い先生を見ると、公務分掌など大変そうだなという印象があった。ある程度の規模があると仕事を軽減してもらったりするが、小規模校だと厳しいのではないかと思った。それはどこの地域に行っても最初は不安感はあると思うが。

へき地校実習では、地域とのつながりは強いと思った。地域とつながりを作るという点は、見方は変わった。地域が関わると子どもたちにもいい影響はあると思う。

へき地教育実習は、すぐに指導に役に立っているという実感はないが、これからもへき地小規模校に行くわけだし、トータルに見て、それは役に立つと思う。少なくともへき地小規模校に赴任することを拒否はしないと思う。地域学校教育専攻の学生とかは、身近にへき地に行くことが多いので、そういう経験があると抵抗感はなくなると思う。